

15 年間診断できなかった家族性地中海熱による腹痛の 1 例

高槻病院・消化器外科 川崎健太郎、高橋資典、朝倉 力、山田康太、大和田善之、
細野雅義、岡崎太郎、家永哲也 高槻病院・小児科 谷内 昇一郎
しんあい病院・内科 稲本真也 森田内科・胃腸内科 森田英次郎

【はじめに】家族性地中海熱は、漿膜炎などを反復する常染色体劣性遺伝の自己炎症疾患である。発熱と激しい腹痛を訴えることが多いが、まれな疾患であるため診断に難渋することも多い。

【症例】30 歳代女性

【主訴】腹痛

【家族歴】祖父 胃癌

【既往歴、投薬歴】特記事項なし

【現病歴】15 歳から腹痛あり腹膜炎として治療されていた。18 歳、試験開腹するも原因不明で虫垂切除術を行った。26 歳 腹痛が再発。28 歳 尿管遺残症疑いで切除術を行うも瘻孔はなかった。2016 年 6 月軽快しないため当院を受診した。腹痛はほぼ毎月、どちらかと言えば生理中が多い。腹痛部位ははっきり決まっていない。

【初診時採血】WBC 10800, CRP 1.37 と軽度の炎症所見のみだった。

【初診時検査】エコー、CT、MRI、GFS、CF では腹痛をきたすような異常は認めなかった。

【受診後の経過】諸検査は異常を認めなかったが、6 月、8 月に腹痛発作が出現した。発作時は 38 度の発熱と WBC10000, CRP15 前後の炎症所見を伴うが、NSAID で 3 日ほどで軽快した。異所性子宮内膜症を疑い婦人科に紹介、リュープロレリン酢酸塩を使用したが発作が出現した。当院の消化器内科から、大学病院の消化器内科と産婦人科に紹介されたが、経過観察を勧められた。2017 年 4 月審査腹腔鏡を行ったが、異所性子宮内膜症がないことが確認できたのみだった。8 月診療所でカプセル内視鏡でおこなったが異常はなかった。しばらく腹痛はなかったが、2017 年 11 月、2018 年 1 月三度腹痛発作が出現した。2018 年 2 月家族性地中海熱である可能性が判明した。その後コルヒチン投与にて腹痛は軽快した。

【まとめ】15 年間診断できなかった家族性地中海熱による腹痛の一例を経験した。本疾患は非常に稀であるため知っていることがもっとも重要である。若干の文献的考察を加えて報告する。